

【唐衣】 からころも その1

「からころも」は『万葉集』では「可良許呂毛」「韓衣」「辛衣」の字が当てられ、『古今集』以降「唐衣」の字が一般となったようです。

用例を見ると、丁度、我々が唐物という茶道具の概念を持つと同じように、本来は渡来の高級な衣、中国風の服装、胡服の一種、あるいはその写しを総称したものと思われれます。しかし、歌語としては男女双方の服装に用いられる美称として、特定の服に限定しなかったようです。

唐衣は「紐」「裾」「袖」「袂」「着る」「裁つ」「褻」「かへす」など衣服に関する物事の枕詞、また「裁つ」の音から「発つ」「龍田」の枕詞としてもよく古典に見かけます。

庶民の服装に対してもこの枕詞は使いますので、被修飾語は高級な衣に限るものではなかったようです。

これだけ多くの語の枕詞なのですから、当然使われる頻度は高かったようです。

『源氏物語』行幸に、末摘花が光源氏に贈る歌にはいつも「唐衣」を詠み込んであるので、源氏はうんざりして、

・唐衣またから衣からころも かへすがへすもから衣なる
と嘲笑する場面があります。

この話はこの枕詞がありふれた言葉であったことを物語っています。

・唐衣きつつなれにし妻しあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ 『伊勢物語』
〔着慣れた衣のような妻を残してきたので、遠くまで来てしまった旅を悲しく思う〕

『伊勢物語』の中でも第九段「東下り」は「筒井筒」と共に特に世に知られている話でしょう。昔男(在原業平)が京の都を追放となり、数人の供と関東の地へ下る話です。

その道中のことです。三河国八橋の沢の畔にて食事をしながら杜若[かきつばた]を眺めていました。

その折、一行のひとりが、か・き・つ・ば・た・の五つの文字を各五句の頭に置き一首を詠む折句の技法で、京に残してきた妻への思いを詠んだのがこの歌です。

『古今集』羈旅歌には在原業平の歌として所収されています。

一行はこの歌に涙を流し、食事のかれ飯(乾燥米)が涙でふやけたということです。

この歌の唐衣は、ありふれた唐衣の一例に留めておくことのできない、極めて深い意味を持った枕詞だと思っています。今回は、この歌の唐衣の意味を探りましょう。